

浄土

monthly
JŌDO

May 2001

5



法然上人鑽仰会

日本テレコムで、
21世紀も
思いきりしゃべったろ。

市内も、県内も、県外も、国際も。
マイライン選ぶなら、日本テレコム。

OK!

マイラインまるごと、日本テレコム。



電話会社選択サービス
マイライン
平成13年1月10日申込受付開始
平成13年5月1日サービス開始

マイラインの「日本テレコム」への
お申し込み方法

「マイライン」「マイラインプラス」は、市内通話、同一県内の市外通話、県外への通話、国際通話の4つの通話区分で、ご利用になる電話会社を選んで登録する、電話の新しい制度です。月々のご利用料金はかかりません。日本テレコムをお選びになると、0088(国内電話)、0041(国際電話)などの番号を押さなくともご利用になれます。現在、日本テレコムにご加入の方の割引サービス等は継続してご利用いただけます。

日本テレコムにご加入の方へは直接、「マイライン申込書」をお送りいたします。未加入の方は、下記のお客センターまたはホームページへお問い合わせください。

※「マイライン」「マイラインプラス」は、NTT東日本・西日本のサービスであり、日本テレコムはマイライン事業者協議会のメンバーです。

●マイラインのお問い合わせは
お客様センターまたはホームページへ ☎ **0088-82** (無料) [受付時間] 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ
<http://www.japan-telecom.co.jp/>

インターネット(ODN)も、携帯(J-PHONE)も、通信まるごと日本テレコム。

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

東京・町田

養運寺

山門からのぞむ養運寺本堂と養運寺
第五十五世田中光成住職、和子夫人



本尊は江戸時代初期の美しい阿弥陀如来坐像



養蓮寺本堂の内陣



小松均画伯筆の牡丹と蓮の天井絵。
一代前の鐘樓堂に飾ってあった



観音像には、異国情緒漂よう正観
音像が秘仏として祀られている



本堂と並んで建っている武相観音第五番札所の観音堂



平成十一年に新築された鐘楼。
梵鐘は、「蘇峰の鐘」である

小田急線のすぐ脇に玉川学園の入口がある。入口の碑には創始者、小原國芳の言葉が彫られている



本堂裏手の養蓮寺山林。よく手入れされた歩道は、みんなの散歩道となっている



穏やかで優しさが自然とにじみ出る田中光成養蓮寺住職

浄土

2001/5月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 養運寺	写真=タカオカ邦彦	1
シリーズ・詠唱 月影 (後編)	藤堂恭俊	6
寺院紀行東京町田 養運寺	真山剛	12
『法然の哀しみ』を読んで	林田康順	22
表紙の言葉	宇高良哲	29
街角こぼればなし「さくらの間」になった老桜	編集部	14
つぼ庭日記	近藤啞々砂	34
響流十方	林田康順	40
連載「くすり箱」	市川真人	44
仏教歳時記	佐々木美冬	46
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52

表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎



シリーズ詠唱

月影

月影の

いたらぬ里はなけれども

ながむる人の

心にぞすむ

(後編)

法然上人のおうた研修会(第一回) 講談より

大本山増上寺第八十六世法主

藤堂恭俊

月影のお歌のなかでいろいろ議論をされるのが、一番最後の二字ではございませんでしょうか。つまりスムというところで。

今まで申し上げたことをお心得頂いた上で、スムということの内容を、ご判断を頂きたいと思います。スムにはざっと上げて五種類の漢字が当てはまります。澄と清と栖と棲と住です。

池の水のお歌じゃないけれども、心が濁っていると、お念佛を申せば心が澄むんだらうと、澄むという字をお選びになるお方が多いようです。私が勝手にそう思っているのかも知れませんが、皆さん各自のご判断に、お任せをしたいと思います。

そこで、先ず、サンズイ偏に登という「澄」という字、なるほど辞典を引きますと、スムという字が先で、その次にキヨシとこう書いてあります。そうしてキヨクスムこととあります。このスムは、どういうスムかといえますと、国語辞典を見ますと、この「澄」という字は、透き通ると書いてあります。二番目には明らかにする。三番目には、悩み、邪念などを去り、心が落ち着くと書いてあります。四番目は、音色、色彩がさえることとあります。五番目が、濁音に対して清音を発声する。六番目はこれは古語でございすね、騒ぎが治まるとあります。これが、『今昔物語』、『源氏物語』になりますと、垢抜けするといふような意味になるようでございます。

下から二番目の「清」は、キヨシという方が先に出てきて、二番目にスムと。このように、漢和辞典にはなっています。

さあ、そこでこんどは木偏が二つございます。木偏に西の「栖」、これはスムと書いて、普通は休む、憩うという意味となります。そうしてまた「すみ家」、それから「とや、ね

ぐら」と、この様に書かれてございます。鳥がねぐらにとまると、元は西にその義があつたと、ところがそれに木を加えてこの字になつたと、このように書かれています。

その次の木偏に妻という「棲」という字、これもスムです。普通の漢字で棲み家と、鳥が木に住むという意味です。

次は人偏に主の字「住」でございます。これもスム。住まい、住みか、とどまるという意味です。

「月影の いたらぬ里はなけれども」、月影の、つまり月のお光、阿彌陀さまの光明の、主人公阿彌陀さまの、「ながむる人」お念佛を申す人の心にスムのは、何がスムのでしょうか、濁った水が透き通つて、その水がスムのか、阿彌陀さまがお宿り下さるのか、どちらでございましょうか。どうぞご自身で決めてください。

佛を念ずるということは、今までは佛さまはホツトケで、人間の性さがに振り回されていました。欲に振り回され、「あれが欲しいこれが欲しい」と、「お父さんあれ買いたいけども、何とか工面して」なんて、甘たれていたかと思うと、「いうことを聞いてくれない」なんて怒つてみたり、「今晚からはごちそう食べささんぞ」なんていわれて、そういうものに振り回されていたのです。つまりこれはもう人間の性が、煩惱が心の主人公になっているわけです。お念佛の南無というのは婦命ということです。帰るといふ字と、命というのが書いてあります。南無とは。自分の身と心とのすべてを阿彌陀さまの前に放り出して、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と一声一声毎に、この「俺が俺が」という心を、放り出すわけなのです。しかも、ただ放り出すだけではありません、放り出せば放り出すほどに、阿彌陀さまからの、お声がかかってくるのです。そのお声を阿彌陀さまの詔と承つて、そ

の通りに信仰の道をひた走りに続けさせて頂くのです。

心を空っぽにするのだから、今までの人間の性、煩惱の働きようがありません。阿彌陀さまが心に入って下さる訳です。念佛っていうのはそういうことです。佛を念ずるので、今までは「あれが欲しいこれが欲しい」、「あの時計が欲しいな」と物に、心が治まっていたのです。今度はそうではありません。阿彌陀さまが心に入っているのです。あの徳本行者も「鬼も蛇も、かくまいおきて何とする。阿彌陀ブツブツいうて、追い出せ」、鬼や蛇というのは、その煩惱のことです。「あれが欲しいこれが欲しい」という、その貪りのころ、更には又怒り、腹立ちの心、もう一つはものの道理を踏み外す、その心の働きを放り出してしまえと。そうして南彌阿彌陀佛と、阿彌陀さまを、心の主人公に迎えなさいと。徳本行者様はいいお歌をちゃんと残しておいて下さいました。だから、濁った心が、勿論澄みますけれども、濁った心が澄むというように、お受け取りになるのは直接そうなるのではなく、阿彌陀さまを心の主人公に迎えるからこそ、この濁った心が澄んでくる訳です。煩惱という場合もこれはもう結果です。煩うという字が書いてある、そして悩むです。「困った困った」っていうことなのです。

実は、人間の性にがんじがために縛られているから、「ああしろこうしろ」といつて追い使われて、まるで人間の性の奴隷になっっているのです。人間の性というのは、これ生まれながらにしてみんな持っているものです。みんな同一平等に「こうしなさいよ」と、教えられることもなし、練習したこともないのに、それが上手に出来るのだから不思議です。皆さん上手ですね。私も上手にやっています。それにがんじがために縛られて、命令され、挙げ句の果てに「困った困った」、「どうしよう」なんてことになるのです。その困った状

態が、字では煩惱って書くのです。漢音で読みますとハンノウです。呉音で読むからボンノウです。結果をいつてる訳ですね。「ここにぞすむ」のスムも、結果ばかりをいわないで、どうすればそういう結果が出てくるのかと、阿彌陀さまをお念佛するから、心の主人公の宿替えがちゃんと出来たことになり、阿彌陀さまを心の主人公にすることができのです。今まで自分の主人公のように思ってた、人間の性を追い出すことができたのです。

阿彌陀さまを心の主人公に迎えますと、手が出て、すーと引つ込むことになります。云おうと思つても、云えなくなつてきます。煩惱は断ち切ることはできません。不断煩惱といわれています。煩惱を断ち切るのは聖道門の方です。わたし達は煩惱は断ち切れないでいいのです。お釈迦さまでも死ぬまで、お隠れになるまで、煩惱をお持ちになっていたといわれています。煩惱を断ぜずして、涅槃の分を得るといいます。涅槃ということは、お悟りを開くということです。ところがお念佛申すお方は、おさとりを開くような、そういった修行した憶えはない訳です。お念佛だけしかしていない。お悟りを開くための行を、特別にしないけれども、その行をしたと同じ状態になることが出来るから、涅槃分と書いてあるのです。涅槃そのものではありません。それに匹敵する境地を我が身に迎えることが出来ると、こういうことでございます。

(第一回 了)

〈附 記〉

法然上人のおうた研修会について

この研修会は、増上寺教務課の絶大なるご協力のもと「増上寺聖歌隊」が主催して、前藤堂ご法主台下に三回にわたりご講義をいただいた研修会です。

藤堂台下から法然上人のお歌の講義を拝聴することを、「増上寺聖歌隊」のかねてからの念願として、荒木憲子氏、大室喜代子氏などが中心となって進めていた話に体調不調も顧みず、台下自から率先して実現した研修会と聞きます。

昨年二月二十九日に第一回目（四月号より掲載）、五月十八日に第二回目、そして十月十日の第三回目と、台下はすぐれぬ体調にもかかわらず、毎日長時間に渡るご講義をなされたということです。

藤堂台下のお心をしっかりと、受け止め永遠に伝えてゆくために、ここに抜粋ではありますが、講義の一端を掲載しご遺徳を偲びたいと存じます。

（編集部）

寺院紀行

東京・町田

養運寺

撮影／夕力才力邦彦

文／真山 剛



養運寺本堂（左）と客殿庫裡

東京都町田市、多摩丘陵に広がるこの町田市は、昭和四十年前後より人工が急増した東京のベッドタウンである。今回は人工三十六万人の町田市の原点ともいえる本町田にある養運寺を訪れる。

鶏足山養運寺は十三世紀に創建された天台宗の寺院をその前身とする。そしてその天台の寺院が、本連載でも訪れた八王子の古刹、極楽寺の末寺として浄土宗に改宗したのが、永禄十（一五六七）年のことである。開山上人は本連社暫誉上人。

天台宗の寺院が浄土宗に変わったと聞くと、今なら何やら奇妙に聞こえるが、当時改宗は珍しくなく、天台、真言の寺院から鎌倉に起こった宗派に変わる寺院が多かった。養運寺の前身となる天台宗の寺庵も、地域の阿弥陀信仰の拠点だったらしく、阿弥陀仏を記した板碑が九基も出土している。おそらく、かつての鎌倉街道沿いで、宿という古い地名に表されるごとく、市が立つ地域の中心となった寺院であつたに違いない。

この街道沿いで賑わった本町田だが、養運寺が創建されて十年ほど後の天正十（一五八〇）年、現在の原町田を中心とした原町田村と分かれてから、その活況が徐々に衰えてゆくことになる。明治に入ると生糸市を開く原町田に多くの人が流れていってしまった。

現在はJR、小田急線とも町田という駅名になっているが、かつてはJRが原町田、小田急線が新原町田の駅名を用いたように、そ



ここに本町田の文字はない。

ちなみに町田に鉄道が通ったのは明治四十一年で、それまでに三度も申請却下があった難産路線だった。鉄道名は横浜鉄道で、東神奈川と八王子を結ぶ、生糸を運ぶための路線の色合いが強かった。

さて、原町田に人が流れていった状況を端的に表す数字がここにある。五十五という数字である。

養運寺の現在の住職、田中光成住職は五十五世だが、実父であり先代である田中實成住職が八王子の極楽寺から住職としてこの寺に入ったのが昭和十六年、そしてその前の住職である吉本法善住職が入ったのは大正十年。つまり先々代は養運寺創建から数え五十三人目の住職であり、三百五十五年間で五十二回、代が変わったのである。平均すると約七年弱で住職が変わっている計算になる。

「私はこの寺で昭和二十四年に生まれましたが、記憶に残っているのは土間の玄関の青かびと麦藁屋根、やたらと何処にでもいたヘビでしたね」

子供の頃の思いでを手操ってくれた住職は言う。

「私でもう五十五世です。余所のお寺に比べたら随分住職が変わっているでしょう。どうも貧乏寺で住職が長く居着かなかったみたいですよ」

確かにこのシリーズで取材した寺院を振り返ってみても、千六百



かつて養運寺の境内にあった尼僧寺、
清林庵を思わせる、珍しい尼僧の木像



江戸時代の二度にわたる火災
をくり抜けた不動明王木像

年前後に創建された寺院の中で、五十五世というのは珍しい。確かに居心地が悪かったのかもしれない。何をもつて居心地が悪いというかは難しいが、阿弥陀信仰の強い地域ではあっても、信仰の強さと寺の経済力は必ずしも一致しない。素直に考えると、原町田村の分村以来、養運寺は寺領もあり、阿弥陀信仰の拠り所ではあったものの、経済的には厳しかったのかもしれない。住職は続ける。

「文化七（一八一〇）」文政八年頃に編纂された『新編武蔵風土記稿』では本町田について、『ソノ地ハ郡ノ東南ニヨレル所ニシテ江戸日本橋ヨリ十里ノ行程ナリ民家百四軒字宿ト云所ニ軒ヲツラヌコノ所ニテ毎月七日ニ市ヲナシテ近郷ノ人頗ルツトヘリ故ニ僻地ノ村落ナレト宿駅ナトノ如ク見ユ』とありますが、歴史に詳しいある総代さんの話では『この時代に宿に百四軒の家があったとは思えない、恐らくは本町田全体で百四軒ではなかったのか』と言うのですね、江戸期の本町田は現在、本町田、旭町、中町、玉川学園と四町に分けられているかなり広い地域ですから、風土記稿にも「僻地の村落」と書かれています、わずかなお檀家が養運寺を支え続けてきたのでしょうかね」

しかし、昭和の始めに養運寺に大きな変化が訪れる芽が蒔かれることになる。昭和二年の小田急線開通に伴う昭和四年の玉川学園の創設である。

小田急線玉川学園前。この学園設立が養運寺に大きな変化をもたらせた



小田急線は昭和二年四月一日に新宿と小田原を結ぶ路線で開業した。先の横浜鉄道の原町田駅から少し離れた所で交差し、そこに新原町田駅が誕生したが、新宿から向かって鶴川駅と新原町田駅との間が七キロメートル近くも離れていた。ここに目をつけ、ちょうどその中間に設立された玉川学園が、養運寺を大きく変貌させる引き金となったのである。

玉川学園の創始者は小原國芳。成城学園を設立した沢柳政太郎にパートナーとして広島高等師範学校から呼び寄せられたが、二人はやがてそれぞれの道を歩き、小原は持論の労作教育で新教育革新運動を実現しようと、新学園の候補地を探している時でもあった。そして鶴川、新原町田間のちょうど真ん中の土地を買収。校舎とともに小田急と掛け合い、玉川学園前駅を新設。昭和四年四月、新駅のオープンと同時に学園を開校させたのである。

当時の玉川学園は幼稚園、小学校、中学校で、児童と生徒数は合わせておよそ百人。新駅ができたとはいえ当時は武蔵野の丘陵地帯の山間に、民家数十戸が点在するばかりだった。

にもかかわらず、この玉川学園の開校が養運寺の変貌のきっかけとなったのは訳がある。小原学園長は鹿兒島は薩摩半島の西南端の坊津町久志の出身。この久志はすぐ西に位置する枕崎と並ぶ鰹漁の基地である。質実剛健で人情が厚い上に漁師町の人たちは信心深



檀家さんから養運寺に寄進された山林に建つ、町田市立博物館

い。しかも浄土真宗の盛んな地域であった。

小原は学園の発展のためにと同郷の人々をつぎつぎと呼び寄せたのである。そうして玉川学園駅の周りには鹿兒島出身の浄土真宗の信者が増えてくる。信心深い彼らはすぐお寺を探すが、あいにく浄土真宗の寺院は近くにない。そこで同じ阿弥陀信仰の浄土宗、養運寺の檀家になっていくのである。

その後、昭和二十二年には玉川学園に大学が開設され、まだまだ山林や農地ばかりとはいえ、住民は増えていく。この戦後の経済成長とともに人工が急増していった経緯については説明の必要はないだろう。

さて、こうした地域と密着した養運寺の境内に目を向けてみよう。かつての鎌倉街道から見上げる位置に本堂と観音堂が並ぶ。正観音坐像を祀る観音堂は武相観音第五番札所であり、どこか異国情緒を漂わせる姿の観音像は秘仏で、十二年に一度、卯年の四月に一月だけ開帳される。

本堂に続く階段の途中には総門が聳え、境内のあちこちには六地藏や十三重塔などが点在している。本堂は間口七軒半、奥行六軒で、本尊は江戸初期作の阿弥陀如来座像で、高さ五十四センチ。稀に見る美像と評価される仏像である。

観音堂の前には平成十一年に新築したばかりの鐘楼が聳えてい



徳島蘇峰の銘の入った梵鐘。先代が昭和
三十二年に越後の高岡で鑄造した名鐘だ

る。ちなみに立て直す前の鐘楼には小松均画伯による牡丹と蓮の花が天井絵として飾ってあったが、今は外され保存されている。梵鐘は昭和三十二（一九五七）年、越中高岡で鑄造された逸品で、徳富蘇峰筆の「警醒濁世煩惱夢 振起人天偕和心」の二行の銘の入った鐘で、「蘇峰の鐘」と呼ばれている。また、今はないが、かつては阿弥陀三尊が祀られていた清林庵という尼僧堂があった。今の本堂に尼僧の木像が祀られているが、そうした庵の名残りかもしれない。また不動明王の像が残っているが出自は明らかではない。

こうした伽藍や仏像などの他に養運寺ならではのものがある。本堂裏に続く山林である。三千坪ある境内の多くを占める山林は桜の木が並び、檀信徒が一年に一度下草を刈ってくれることもあり、近所の人たちの散歩道や抜け道として利用されている。寺領部分は細長く、ゆっくり歩けば抜けるのに五―六分はかかりそうだ。

また、檀家さんから寄進された六千坪の山林がある。現在はここを町田市博物館として、また公園用地として提供している。

「この町は私の子供の頃からでも、とても変わりました。ここに昭和二十二年の、この付近の航空写真がありますが、田んぼばかりでしょう。恩田川と鶴見川のおかげで米がとれていたのです。それが今ではかげも形もない。

時代の流れといえはそれまでですし、新しい住宅や団地に住む人



昭和二十二年の養運寺付近の航空写真。
まだ、一帯が水田の丘陵地帯であった。

たちのおかげでこの寺も支えていただいているのは確かですが、いま残っている養運寺の自然は、かつての武蔵野の面影として、できるだけ残していきたいと思っています」

住職はいま、小さな鷹に凝っているという。境内の庭木などにしばしば降りてくる小型の鷹で、その凛々しさに惹かれ、写真に撮ろうと近づいたところ、果敢にも攻撃を仕掛けて来たという。そのためバードウォッチング用の双眼鏡での観察になるそうだが、そうした野鳥が生息する自然が、まだまだこの町田市の多摩丘陵には残っているのである。

取材後に住職に車を運転していただき、玉川学園前駅までお送りいただいた。途中、本町田遺跡公園に立ち寄った。町田市は遺跡の町といつてよいほど、縄文や弥生時代の遺跡が多く、その数は五百を超える。その中でもこの本町田には遺跡が集中している。

半径三十メートル位の台地で十一の遺跡が発掘され、縄文と弥生時代の住居がそれぞれ一つづつ復元され、開放されている。町田市のほとんどを占める東南多摩丘陵は太古の昔から陽当たりがよく、水の便も良かったという証だが、今は経済成長とともに建てられた住宅が並んでいる。そうした中で養運寺はいつまでその面影を残せるのか。これも寺院の大切な役割に違いない。

(ルポライター)



本町田遺跡公園に復元された弥生式住居

『法然の哀しみ』
を読んで

『法然の哀しみ』

～副題・親鸞序説？～

林田康順

昨年十二月十三日頃からお世話になっている編集部の方から「梅原猛氏の『法然の哀しみ』に率直な意見を寄せてくれないか」とのご依頼を受けた。「私ごとき若僧では役不足だろう」と即答は控えた。

明くる十二月十四日早晩、恩師、大本山増上寺法主・藤堂恭俊先生ご遷化の報を受けた。十五日、増上寺に参り、幸いにも、住生の素懷を遂げられなごやかに微笑まれている先生のご尊顔を拝することができた。還相回向の早からんことを願い、しばしお念仏を称え、こらえきれずに涙を流しつつ、私に浄土宗学のなんたるかを教えてくださった藤堂先生の学恩に少しでも報いるべく、この依頼を引き受けようと考えた次第である。

「知の巨人」と称される梅原氏が浄土宗祖・念仏元祖である法然上人を取り上げてくださる、大著『法然の哀しみ』を上梓されたことは慶賀に堪えない。特に、フィールドワ

ークを重視され、数年前に『中外日報』紙上に連載されていたころから異彩を放っていた「第一章・御影を読む」は、御影や彫像から法然上人像を浮かび上がらせるという、これまででない画期的な切り口であろうと思われる。その他、梅原氏らしい斬新な視点が随所に見られ、まことに興味深い内容であった。

しかし、である。

実は、私がこの本を手にする以前、ある先生がそのゲラ刷りをお持ちになり「今度、梅原さんと対談するから、急いで読んでおかねばならないんだよ」とおっしゃった。それに對し「それは大変ですね。ただ、例によって法然上人から親鸞聖人へという流れになつていないことを祈るばかりです。」と申し上げることがある。しかし、残念ながらその予想が覆ることはなかった。いくつかの例を挙げてみよう。

まず「法然を超えて（五九九頁）」では「親鸞は法然の浄土教を他力に自力を交える

浄土教とみていたと解釈しなくてはならないことになる。法然においてまだ残っていた自力と『観無量寿経』の匂いを一掃した、新しい浄土教を立てたと彼は秘かに語ろうとしているのではないかと思う」とある。また「悪

人正機説に魅せられた近代人（六〇二頁）では「私は三願転入の説を語ることによって、法然の中にあつた美的浄土教の名残が、親鸞においてみごとに一掃されるのを見た。それは師の説をいつそうすすめた結果であり、かならずしも師の説からの逸脱とはいえない」とある。あるいは「法然の思想を深化させた

親鸞（六一四頁）」なる項を設け、さらには「近代教学が失つたもの（六二九頁）」では「この（還相廻向）説こそ、まさに親鸞によつてより深く思索され、親鸞教学のバイブルと言うべき『教行信証』のもっとも中核的な理論を構成しているのである。法然には『選択集』にあらわれた浄土宗の顕教というべきものの以外にも、二種廻向の説を中心とした浄

土宗の密教というものがあり、それが親鸞においてあざやかに顕在化され、この化物の心、利生の心が多くの日本の民衆を感化せしめたものではないかと思う」とある。

氏は「法然は鎌倉仏教のトップバッターであり、しかもそのトップスターである（六三四頁）」と法然上人を実に高く評価して下さっている。しかし、指摘したような内容が本書末尾に集中的に語られていれば、結果として大方の読者は「やはり親鸞こそ」という思いを抱かざる得ないであろう。

その一方で、浄土宗二祖聖光上人・三祖良忠上人の評価は至って低い。例えば「聖光房弁長・鎮西派を築いた熱血の人（四三八頁）」では「考えてみれば、弁長のしたことはおもに造寺造塔である。これは法然によつて雑行として退けられたことである。弁長はまさに師法然によつて否定された、彼がいちばん得意とする造寺造塔の仕事をして、法然の浄土教発展のための大きな礎を築いたのである。

そして弁長の弟子良忠もまた法然の教えをかくとく守るとともに、造寺造塔を得意として、ついに幕府の本拠地鎌倉に布教し、鎌倉における浄土宗の本山光明寺をつくった」とある。梅原氏の目には、聖光・良忠両上人には思想的にとりたててみるべきものは何もなく「法然によって雑行として退けられた」造寺造塔の得意な僧とのみ映ったようである。両上人と親鸞聖人との差は歴然である。これでは、聖光・良忠両上人を二祖・三祖と仰ぐ浄土宗僧侶、及びその檀信徒にとつては、やるせないばかりが残るであろう。

こうした一連の氏の視点は、私が、各所で申し上げている、教団の大きさと祖師の教えの質を比例して語ってしまうというこれまでの悪弊から足を踏み出せていない結果であるうと思われる。これでは、元の木阿弥であり、副題に「親鸞序説」とでもつけていただいた方がよほどすっきりするようにさえ思われるのである。

しかし、既にわが浄土宗学において望月信亨師・高橋弘次師が、あるいは、仏教学の立場から田村芳朗氏や松本史朗氏が明らかにされ、私自身も、既に本誌を中心に各所で述べさせていたでいるように、親鸞聖人の思想は、せっかく法然上人が聖道門から「ひとりだち」させてくださった浄土教（人格的阿弥陀仏と有相の極楽浄土の実在）を再び聖道門ととりわけ本覚思想の浄土教へと逆戻りさせたものに他ならない。

ところで、氏は「二種廻向説を排除した近代真宗学（六〇四頁）」において「人間が死んで極楽浄土へいく。それは近代化学を信ずる人間にとつてはまったく信じられない迷信のように思われた。それゆえ、近代の浄土宗、浄土真宗の僧は、法然や親鸞のように熱烈に死後の浄土を説くことをしない。浄土を説くことは近代の僧たちにとっては恥ずかしいことである。死んでから浄土にいくことが信じ

られないとしたら、死んで浄土へいって、またかえってくるなどということは、いっそう信じられないことではないか。とすれば浄土へいく往相廻向も、浄土へいった後にまたこの世へかえってくる還相廻向も、すべてばかりしい迷信であることになる。それであるべくそういう迷信を語らず、科学を信じる現代人に合わせて浄土教を改造しようとする」と貴重な指摘をされておられる。

なるほど「いろもなし、かたちもましまさず。しかればころもおよばれず、ことばもたへたり（『唯信鈔文意』）」という真如法性、仏教学という法身を「無上仏」と捉える親鸞聖人を宗祖にいただいている以上、その思想を真摯に学ばれた近代真宗学の碩学が、「仏が私を救うのではない。私を救うはたらきを仏という（安田理深氏・東本願寺配布「揭示法語」より）」と語り、「今私が『私』と言っているような私が、私でなくなった時、実は天地が一枚に解け合い、そして万物が光輝い

ているような、そんな領域が開けてくる。そんな領域が浄土の世界じゃないのか（梯実圓氏『教学シリーズ（10）往生浄土（上）』教学シンポジウム）一四七頁、本願寺出版社」と述べているのも至極当然の結果である。ありていに言えば、法然上人と別離の後、これまで学ばれた仏教学（実は本覚思想）の常識の中で阿弥陀仏や極楽浄土を解釈しようとしたのが親鸞聖人の思想に他ならない。したがって、当然その結果は天台・密教・禅などの聖道門の捉える仏身・仏土観に逆戻りせざるを得ないのである。おそらく梅原氏ご自身も薄々お気づきであろうが、「近い将来やってくるであろう法然自身の死のことを考えて、父時国や母秦氏をはじめとする、地獄の苦しみを味わっているにちがいない法然の縁ある人々を、法然自身が極楽往生して助けようという意志によって（『逆修説法』）は」行われたものではなからうか。還相廻向の中には、そのような死者救済の意志もふくまれている

と考えるべきであろう（六二八頁）」という氏の尊い指摘を成立させ得るような「死後の浄土」、言い換えれば、「私とあなた」という関係を継続でき得るような「俱会一処の場」は、親鸞聖人の思想の厳密な精査からは決して見出されないのである。

その一方、氏がほとんど評価をくだされなかった聖光上人・良忠上人をいただくわが浄土宗こそは、法然上人の教えを忠実に守り、決して聖道門の教えに流されることなく、さらには「科学を信じる現代人に合わせて浄土教を改造」することもなく、それこそ頑なに「俱会一処」を成立させる「死後の浄土」の实在を堅持してきたのであり、それが、恩師藤堂先生が私に教えてくださった「阿弥陀仏・極楽浄土の实在をはじめ二種廻向説を決して排除しなかった浄土宗学の伝灯なのである。

台掌

（大正大学講師）

（本稿に関して、本誌『浄土』に掲載してきた以下の拙稿をご覧いただければ幸いである。「御法語に聴く、喜びの心と感謝の心」凡夫の心定まり難し（平成十一年五月号）、「御法語に聴く、善人と悪人と阿弥陀さまのねがい」（同十月号）、「御法語に聴く、なき人のために」お念仏の廻向（平成十二年一月号）、「響流十方、二つの浄土」法然上人と親鸞聖人（同五月号）、「響流十方、至誠心」まことの心（同九月号）、「響流十方、たった一度の（この私）の往生（同十二月号）」。また未刊であるが、『石上善應教授古稀記念論文集』所収の拙稿「法然上人における俱会一処への視座」親鸞聖人との対比を通じて」も参照されたい）

（お詫びと訂正）

先月号本稿「執筆の中野正明氏は、華頂短期大学教授でございました。ここに訂正しお詫び申し上げます。

ポケット版

施餓鬼會／棚経

こんな経本がほしかった

初めてのお盆の棚経もこれ1冊で大丈夫。

慣れないお施餓鬼会の随喜も、これなら便利。

現場から生まれた、現実的内容と手頃な大きさ。

定価…1000円（送料、税込）
5冊以上で1冊800円（送料別）



サイズ
（縦15.1センチ、横7.8センチ、厚さ8ミリ）

◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 戒法寺内

TEL:03-3441-8971/FAX:03-3441-8702

郵便振替 00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

関白九条忠通の行列に出会う

これは天養二年（一一四五）、十三才の時、法然上人が郷里の美作の観覚得業の許を離れて、遠く滋賀の比叡山に登る途中、京都の洛中で鳥羽殿へ参上する途中の関白九条忠通の行列に出会う場面の一部である。法然上人と九条忠通との出会いは、各種の法然上人伝記の中で、この残欠二巻本にだけ記されている特異な記事である。しかもこの場面は上巻の第三図にこの絵伝の中でもっとも広範囲に描かれている。更に絵画として着色もあざやかで、この絵伝の中で白眉の部分である。九条忠通は法然上人に私淑した関白九条兼実の父であり、この伝記の作者を考える上で注目される。

洛中で忠通の行列の出会った法然上人が、馬から降りて見送っていると、牛車の中からその様子を見ていた忠通公が、小児にしてみたものにあらざとみて法然上人の名前を尋ねられた。学問のため比叡山に登る途中のものであると答えられると、忠通公が感服して法然上人の前を会釈して通りすぎられたのである。行列全体は肅々として進行している中で、法然上人の直前の馬だけが動的に描かれている。これは法然上人の子供ながらの立派な立振舞に周囲の人々がびっくりしているのであろうか。

(宇高良哲・大正大学教授)

街角、こぼればなし

横河電機株式会社

『さくらの間』 老桜になつた

撮影・文／本誌編集部



本会社屋建設前の見事な桜の木



会議室「さくら」は来客応接フロアーにある



YOKOGAWA ◆

よこがわ
横河電機株式会社

1915年、建築家・工学博士横河民輔が設立。
横河工務所→横河建築事務所→横河橋梁から
横河電機となる。計測分野のトップ企業で、
われわれの目に直接触れることの少ない製品
やシステム開発メーカーだが、世界的にもそ
の技術が認められている優良企業だ。

資本金323億6000万円
従業員数5,900人（2000年10月現在）
事業連結会社数44社

桜の季節、ある企業のちょっとした話を耳にしました。

本社ビルを建てるにあたり、切り倒さなければならなくなった桜の木をテーブルにし、しかも「さくらの間」と名付けた応接室の話です。

その企業とは、東京都武蔵野市に本社を置く横河電機株式会社です。計測、制御、情報サービスをビジネスの柱にする計測機器やシステム開発のパイオニアで、国内はもちろん海外進出も早く、業界屈指の名門優良企業です。そこで、溝口文雄副社長にお話を伺いました。

この横河電機の本社の来客応接フロアーには、いくつかの応接室があり、その一つに「さくらの間」という応接室があります。

武蔵野の面影を残す緑溢れる会社敷地内の老木の桜は、毎年、春になると社員の目を楽しませてくれた桜で、うす紅色の花の下で多くの社員が和やかに花見に興じていました。

しかし、本社ビルを建てるにあたり、この桜の木を植え替えようとしたが、老木の為、植え替えが難しく断念せざるを得なかったとのこと。

そこで、この桜をなんとか残したいという皆の思いが集まって、応接間のテーブルに生まれ変わり、そのテーブルがある部屋を「さくらの間」と名付けたのです。

名残という言葉があります。名残とは波残なみのこりで波が引いた後になお残るもの、あることの過ぎ去った後まで尾を引く物事や感情の意味です。「さくらの間」は、会社や社員のこの桜に対する名残の思いが上手に汲み取られています。能の「西行桜」に老木の桜の精が西行に感謝する場面がありますが、この老木の桜も会社と社員に感謝しているのではないのでしょうか。

数字が優先される実業の世界、こうした心遣いや思いやりを大切にすることはなかなか

ありません。

大企業が美術館や記念館を建てることはよくあります。それもひとつの社会還元ではありますが、どうしてもその企業のイメージアップや宣伝的な要素が見え隠れしてしまいます。そうした中、横河電機では毎年、社会還元に使う予算枠を設けて、エジプトの発掘調査やエベレストのゴミ回収、オーケストラへの応援あるいは寺院の天井画の制作・寄付、さらには世界的な医療支援団体の日本支部設置、ハワイの天文台の運営など、国や地域を問わず、あらゆる分野にわたって、幅広く支援を続けています。このように大変柔軟な発想で、メセナ活動を積極的に展開されている企業はまだまだ少ないようです。

「社会の中で生かされている企業はお陰をこうむった社会にいくばくなりともご恩返しをしていきたい」という横河電機の理念が続く限り、この「さくらの間」の話は長く語り継がれることでしょう。

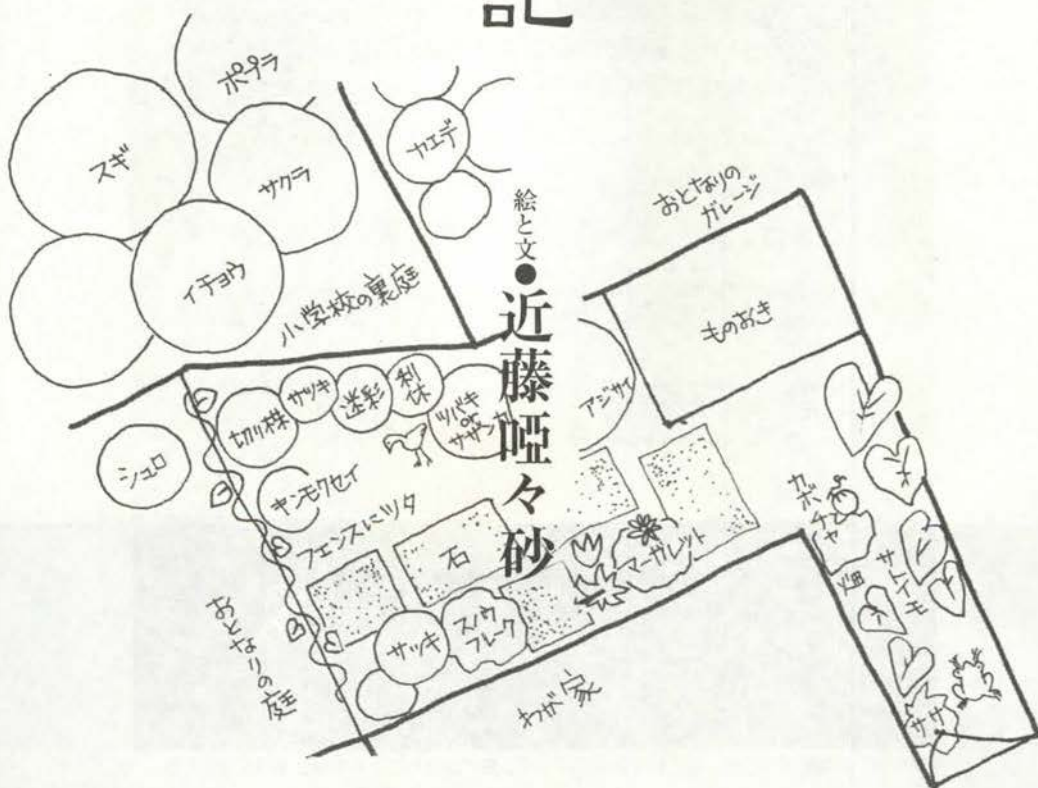


「さくら」の会議室の机は、桜と杉で作られている。奥に座られているのは、溝口文雄副社長。

【冬のふし】

つぼ庭日記

絵と文 ● 近藤 亜々砂



春、鳥の声に耳をかたむける。冬の啼き方とは、どこか違う鳥たちのさえずり。

庭の「利休」が、花をつけた。木の名前がわからず、その容姿から、「利休」とあだ名をつけ、「リンゴ」か、「アンズ」と当たりをつけていたが、ハズレた。「カイドウ」だった。

可憐な花で、色は梅より淡く、桜より濃い淡紅色だ。

つがいのシジュウカラが、花の蜜を吸い、梢に遊び戯れている。

冬の庭を思い出そうとする。

目の前にある春に見とれて、終ったばかりの冬を思いだることができない。

日記がわりに俳句を書きとめた手帳をめくってみる。恐ろしくへたな日々の俳句が並び、ゲンナリする。それでも一句一句読み返すたび、冬の日の思い出がよみがえってきた。

低く飛ぶ寒鴉かんあの羽の乾いた音

北風に落ち葉が舞う。イチヨウにサクラ、ボブラの葉の大きいのが、冬された庭に落ちてくる。

カラスが群れて啼き飛び、騒しい朝だった。小学校の裏庭の熟れた柿の実をついばみに、次々と集まってくる。二十羽、三十羽、いや、もつというかも知れない。

庭に立つと、大きな柿の実を枝ごとくわえたカラスが、バサバサと乾いた羽の音をさせこちらに向って来た。ポカンと見上げていると、足もとに、バサリと柿の実を落としてよこした。

ヒヨドリが桜の花を落としてくれたのとは違う、複雑な気持ちだった。

そういえば、この頃、サザンカの木の根元に置いた陶器の鳥が、何度立て直してもひっくり返っているのは、カラスのいたずらに違いない。そう思った。

鰯焼けば隣りの猫の甘い声

隣りの家が、数日前から猫を飼うようになったらしい。

魚を焼いていると、しつぽの太い茶色の洋猫がフェンスを越えて来た。

「君が隣りの猫か？」ガラスごしの猫の目が、「中に入れてくれ」といつている。「ダメだ！」「ちよっとでいいからさあ」ニャアと鳴いて、身をよじらせている。魚がほしくて、たまらないのだ。鰯は人数分しかない。

あきらめた猫は、身をひる返すと、庭の中をゆっくりと歩き回った。ここに来たのは初めてではないようだった。

アジサイの木の裏にまわり、木の幹に体をすり寄せ、また歩く。

それから、鳥の置き物の臭いをかぐと、鼻で押した。鳥は、コテンとひっくり返った。

カラスのしわざではなかったのだ。

結晶となりし寒さや朝の庭

冬の朝、枯れつくした庭草の下で黒い土がムクムクしている。霜柱だ。息子が庭に下りて、バリバリと霜柱を踏みくだいては笑った。

モズが、「チー」と引き裂くような鋭い声で啼く。胸をふくらませたスズメが、ブロック塀に五、六羽並んで押しくらまんじゅうをしていた。一羽が飛び立つと、それを追って、バラバラと飛び散っていくのが、いかにも冬の風情だった。

ゴミを出しに出ると、向いの家の奥さんに礼を言われた。身に覚えがないのでキョトンとしていると、「ウチの猫が、いろいろごちそうになっているらしい」といい、「あ、この猫です」と出てきた尾っぽの長い黒猫を指さした。すると奥から、次々と猫が現れた。「黒は人なつこくて甘え上手なのだが、トラは気が荒く、白は人見知りで孤独を好み……」と説明が長くなりそうだったので「ウチ



ではない」といい、隣りに最近、洋猫がいることを話した。

スズメや小鳥たちが食べられないためにも猫たちが、いつもお腹いっぱいでありますように。

商店街のサンタクロースの地蔵顔

走り来る児を抱けばストーブのにおい

木々は、すっかり葉を落とし、学校の裏庭がガランと見える。

音楽室から、クリスマスらしい唱歌が、北風に吹かれて、とぎれとぎれに聴こえてきた。

ストーブのにおいをさせ、帰ってきた息子が「今日、保育園にサンタクロースが来た」

という。「ヒゲが、なんか、くつつけたみたいなんだよ、テープで。」「へえー」私は、できるだけ、すました顔であいづちを打った。

「ソリは駅前に停めてきたんだって。」「停めるところないよ」って誰かがいったら、空に

停めといた」って。なんか、あやしいんだよねあ」

夜、サンタクロースに手紙を書いた。息子は、字が書けないから、口述筆記しろという。ぼくのいった通りに全部書け、と。

「サンタさんへ。このまえ、ゴジラをもらったんですけど、シッポがとれやすくなっちゃったので、エー、こんどは、テッコウキミカズキのなかまのゲッコウショゴウキにしてください。」

去年は「ウルトラマンの基地」をお願いしたはずなのに、朝起きたらゴジラが届いていた。サンタが間違ったのかも知れないが、こういう事は困る、という意味のことを、五才児の言葉で話した。

「ウルトラマンの基地」は、とても高価だったので、九八〇円のゴジラにしたのだった。笑いをこらえながら、ゴジラの尾っぽは、本当にそれそうなのか？ と聞くと、「ううん。ウソなの。でも、まだ使えるって分かったら、

もらえないといけないから。」と真剣な顔でいった。

それから、手紙に「ぼくはサンタクロースが、ほんとうにいるってわかっています。」とつけ加えて書かせた。本人の弁では、サンタはいない。お金持ちのおじさんが、化けているのだという。そうでもなければ、町中の子どもたちに、オモチャを配るなどムリな話だそう。

今年は、そのゲッコウシヨゴウキとやらを枕元に置いてやろうと思った。

次の日、商店街に行くと、サンタクロースがチラシを配っていた。やせて、血色の悪いサンタだった。

照り凍る月の輪雲をはじきおり

ある夜、呼鈴に玄関を聞けると、きちんとした背広の男性が立っていた。隣りのご主人が、「鍵を忘れて家に入れないので庭を通し

てほしい」という。外の鉄扉を開けると、片手頼みのかまえて入って来たご主人は、鍵を忘れた理由をいながら庭にまわった。

それから、ツタをかき分け、手慣れたようすで、背だけほどのフェンスをよじ登った。そして、顔だけふり返り、「ども」というと、ひらりと背広をひる返し、あちらの庭に飛び下りた。スタンと音がした。革づつでの、みごとな着地だった。

オリンピックを見たような気分になった。雲をはじくようにこうこうと光る満月が、冴え渡った庭を照らしてる。

しばらく庭に立って、月をながめた。

「風邪ひくよ」と、ガラスごしに夫の声がした。

もう一度、呼鈴が鳴り、「さっきのお礼」といって、ご主人が青みかんを持って来てくれ、ドアのすき間から、入ってきた猫を「これこれ」と抱きかかえて帰っていった。

三人で青みかんを食べた。突然、息子が、「働かされる者、食うべからず」といった。

一切衆生をして平等に往生せしめんが為に
難を捨て易を取りて本願と為したまへる。

（『選択本願念佛集』第三章）

阿弥陀さまは、一切衆生を等しく極樂浄土へ
往生させるために、難しい諸行を選び捨て
て、易しいお念仏を選び取って本願の行とし
て定められたのである。

易しい？ 難しい？ いったい誰が決めたの？

這えば立て 立てば歩めの 親心

わが身につもる 老いを忘れて

「歩いた歩いた！ すごくすごい！」先日、一歳の誕生日を迎えた次男が記念すべきはじめての一步を踏み出した。転んでは立ち転んでは立ちして、少しずつ、しかし着実にその歩みを進めている。

「父は定年を機にきっぱりと運転を止めました。」こちらは、新聞の投書欄に掲載されていた。「年齢による衰えは隠せないから」とハンドルを握らないことを自ら誓った父親に向け、娘さんからこの上ない賛辞の言葉が寄せられていた。

ところで、いったい誰が「易しい・難しい」「できる・できない」などと判断するのだろうか。かくいう今の〈私〉にとっては「歩くこと」も「運転」も、おそらく「易しい」という範疇に入るだろう。けれども、一歳だった〈私〉にとって、まだ見ぬ六十歳の〈私〉にとって、それらは必ずしも「易しい」ものとは言ひ切れない。そして、何もこれは「歩くこと」や「運転」に限ったことではないだろ

う。まさに釈尊の諸行無常の教え通り、今この瞬間も他ならぬ《私》自身の身や心は常に移り変わっており、「易しい・難しい」という判断がそれに伴って移り変わるのも必然の結果だからである。ことほどさように煩惱具足の《私》たちによる「易しい・難しい」などという判断は実にあやふやなものである。

「仏道修行も同じではないか。」法然上人がこう考えられてもなんら不思議はなからう。ところが、法然上人がご活躍された時代、仏教界には次のような常識がまかり通っていた。

穢れたこの世にいながらこの身をこのままで悟りを開くという、ありがたい功德を具えた難しい行を修め、その功德を遂げやすい往生浄土のために振り向けば、今生に悟りを開くまでには至らなくとも、往生することなどたやすいものだと考えております。

〔要義問答〕

所詮、煩惱を断滅し得ない《私》たちによるこうした「易しい・難しい」などという行の判断は、どこまでもあやふやなものに過ぎ

ない。法然上人は、悟りを目指す行と往生を目指す行との峻別さえつかず、ましてや「易しい・難しい」だけで「素晴らしい・素晴らしいくない」という行の判断を下してしまうこうした風潮に対し、
 〈お念仏〓本願往生行、諸行〓成仏行〉という決定的な質的次元の相違を訴え、これまでの仏教界の支配的な常識に敢然と立ち向かっていかれた。そして、煩惱具足の〈私〉たちによる「易しい・難しい」などという実にあやふやで相対的な判断（〓機辺）にきっぱりと見切りをつけ、冒頭に揚げた『選択集』の一節にあるように、この現実世界をお見つめになり、こんな〈私〉たちをなんとかして救おうとご修行を積まれた阿弥陀さまによる「念仏ならば『誰にでも易しい』」という普遍的で絶対的なご判断（〓仏辺〓選択）に、他ならぬこの〈私〉の往生を委ねるようにお示しになられたのである。

這えば立て　立てば歩めの　親心

仏心に　御掌を合わせつ

合掌

（大正大学講師・林田康順）

連載

『くすり箱』^④

涙と目ぐすり

薬剤師

市川真人

涙は、悲しい時にだけ出すものではありません。ごみ等が目に入った時にも、それを流し出そうとして涙は出ます。

涙には四つの働きがあります。①涙の膜で目の表面をカバーし、異物が来ても直接眼球に当たらないようにする保護の機能。②たとえ異物が入ったとしても、それを流し出してしまいう洗淨の機能。③涙自体がタンパク質や糖等の栄養分なので、目への栄養補給の機能。④ばい菌を殺す機能も持っています。だから、涙は最高の天然の目薬です。

飲み薬には、その時の身体の症状に合わせ

て色々な種類の薬があるように、目薬にも症状に合わせて色々な種類があり、使い分けなければなりません。たいした理由も無いのに、気軽に目薬を使う人もいますが、中の成分によつては、長い間さしていると弊害の出てくるものもありますので注意が必要です。塩酸ナファゾリンという成分が入っているものは、す速く充血を取り、スッキリしてとても良い薬ですが、あまりに連用すると、白眼に黄色い色素沈着が起きてくることがあります。お医者様からもらうのはともかく、薬局で目薬を買う時は、是非、薬剤師に相談して

下さい。疲れ目の時、目がかゆい時、赤く充血している時、目が乾いて涙が出ない時、涙がボロボロ出てこまる時、ものもらいのできた時など、みんなさす目薬はちがいます。他にもコンタクトレンズをする時や、目にほこりが入ったり、水泳の後などに、洗い流すための目薬もあります。洗い流そうというのは別ですが、特に指示がない時は、一回一〜二滴、一日三〜五回さす、というのが普通です。顔を上に向けて引いた下まぶたの上に落とします。(目に近付けすぎると容器の先が涙、まつ毛などに触れ、目に付いているホコリや菌が瓶の中に入ってしまうので気を付けて下さい。)さしたら二分位は目を閉じたままでいて下さい。溢れた目薬は手で拭かず、きれいな脱脂綿、ティッシュなどで拭き取って下さい。二種類以上の目薬をさす時は、五分以上間隔を空けて下さい。刺激のある目薬は先にさして下さい。

保存は、特に指示がなければ、室温で、冷

蔵庫の必要はありません。また薬の安全使用のためには、開けて一ヶ月以上経ったものは使わないで下さい。(使用期限の書いてあるものもありますが、それは開けない時のものです)

漢方にも飲む目薬があります。目の病は肝にあり、といわれています。もう少し細かくいうと、瞳孔〓腎、黒眼〓肝に関係があると考えています。『肝腎要』と言われるように、生命活動の中心である肝と腎は、働きを補い合う臓器です。目についていうと、腎に蓄えられた生命エネルギーは、肝の血と協力し目に栄養分をおくり、目の代謝を促進させます。目の使い過ぎは、栄養分を消耗させ、疲れ目、視力の減退につながり、肝・腎の衰えは、老眼、白内障の引き金にもなります。充血、涙目、疲れ目、乾き目、又、視力低下で気になる免許更新。「飲む目薬」で肝・腎を元気にするとよいと思います。



記 時 歳 教 仏

コーラゲン Q&A

Q

コーラゲン優芳は他とどこが違うのですか？

A①

高橋周七博士の大学の老化防止の研究で生まれました。

A②

この研究は先進八カ国（日、カナダ、米、英、独、仏、伊、豪）で特許取得済みです。

A③

単なるコーラゲンのみより、杜仲葉、高麗人參を加味した三位一体のコーラゲン^{ユーハーフ}優芳舞^{ユウハーフ}ははるかにすぐれている。

◆おすすめしたいかた◆

若さ（老化）、
肌荒れ、肥満、
目覚めの悪さ、
ハードな勉強、
仕事、運動、運転
旅行の疲れ、

ゴルフ、テニスなどスポーツ
の記録が気になるかた。

コーラゲン優芳舞^{ユーハーフ}

内容530mg×90粒

1ケース、1日3粒、1ヶ月分

¥5,800（3個の場合）

（1個¥4,800）

申込先（有）優芳舞

☎0120-00-7756

FAX047-448-8166

東京芝、大本山増上寺で行わ

れる薪能はとても人氣があります。

薪能は闇と火の祝祭のよう

で不思議な雰囲気があります。

咽喉笛を女面の下に薪能

橋本多佳子

確かに面の下に喉仏がのぞい

ています。女流らしい鋭い目を

感じます。多佳子の句にはいつ

もドキッとさせられることが多

いのです。

薪能めらめら古き闇燃ゆる

大串 章

こちらはストレート。篝火に

火が点ぜられると、火花が火の

滴りとなる。あたり一帯が浄化

されるようで何ともいえない空

間が構成されていきます。

なほ一歩寂とすすまず薪能

山田耕子

薪能に限らず、能の舞台とは

そいつたものです。時間も空

薪能

佐々木美冬

死者生者一つ闇へと薪能

高橋さだ子

奈良の興福寺では五月。その

ため五月の季語であるようです

が、京都薪能は六月、平安神宮

で行われます。東京薪能といっ

のは一般には十月、新宿御苑で

行われます。一生に一度は見て

おく価値のあるものです。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●風

〈特選〉

千の鳩風を起こして飛び立てり

細田 初枝

寺社の境内だろうか。餌をついばんでいた鳩が、一斉に飛び立つことがある。風圧という大げさだが、それに近い風に驚かされる。多いものに百千万を使うことはよくあるが、便利だけに多用は慎みたいものである。

〈佳作〉

蜘蛛の糸風を味方に提越ゆ

周東 澄江

漁問えば短き仕草春の風

加藤 政男

百態の真菰の枯れを風渡る

小林 恵美

●水

〈特選〉

砂利船の水尾重々と冬かもめ

島谷ときを

石場で砂利を満載した船が、ゆつくりと行く。船べりは水面すれすれにまで沈んでいる。波が来たら沈没してしまいそうである。「水尾

選者=増田河郎子

《特選》

病状を聞くも手振りや春寒し

井村 善也

●自由題

重々と」が以上のすべてを代弁して、余すところがない。

《佳作》

城影を宿して堀の水ぬるむ

中島 一子

余寒なお水に映りし顔を見る

松島 禎子

万国旗なびく遊船水尾光る

森田 麻

病人の家人と道でも会ったのだろうか。

病状の説明にも身振り手振りが入る。田舎の気の知れた同士という様子が見える。季語の扱いに、暖かくなるまでの辛抱を氣遣うところが感じられる。

《佳作》

試歩の背のやや前かがみ草芽吹く

片桐てい女

老妻と手話の真似して春炬燵

西井 正

豆を撒く喉笛太き海女の声

北川 弘子

風

早春の入江明るき風抜ける
薫風やレンガ造りの倉庫群
たんぽぽに風の狼藉ありにけり
中庭の石に風立つ雪柳
荒磯の風に飛びつく巣立鳥
少年と紙飛行機と春風と
風きつて尚子は走るひたむきに
風ありて面目躍如の鯉のぼり
風神を連れて荒れたる一夜かな
六地藏じつと我慢の冬の風
風鐸や律の音とどく春の寺
涅槃図に風おさまれる夕かな
けふからは風を友とす散歩道

石原新

谷しげ子

中島富士子

金谷友江

河合富美枝

山本のり子

中島一子

山本美代子

佐藤雅子

山本小百合

大場清

片桐てい女

長尾子浪

自由題

春立つやぐつと反り身に岬の松
流れ行く誰に涙のなかりけり
夫癒えて散歩がてらに逢つむ
音もなく砂紋くづる春の雷
日当たれば鴨鶴翼の陣を解く
大江山残雪ありて無村寺
しだれ桃こよなく愛てし人なりき
散り桜五弁ハラリとあざやかに
寒島高ぶるもののみな失せて
花壇にて赤城黄色と背くらべ
比翼塚しつぱりくるむ春の雪
春惜しむ錦帯橋の夕景色

水

墓洗う人の気配や水温む
春水やいつも人立つ橋の上
山あいの田に草のあり水ぬるむ
龍燈や我が影に添ふ水明かり
波良瀬の水際の春を惜しみけり
レガッタや水面弾けし若き声
ホースより水はとばしる春の池
水の面に雪明りして鴨四、五羽
むくどりが雪解け水でひと休み
厨房の妻の掌いつか水温む
竹の秋寺領に水の走りけり
春浅し逆さ富士浮く水澄めり
皿洗ふ水にも春の調べあり

安部竹影

中島富士子

金谷友江

河合富美枝

周東澄江

山本のり子

中島一子

山本美代子

佐藤雅子

山本小百合

細田初枝

長尾子浪

谷しげ子

中島富士子

金谷友江

河合富美枝

周東澄江

山本のり子

山本美代子

佐藤雅子

山本小百合

大場清

片桐てい女

細田初枝

長尾子浪

浄土誌上句会の
お知らせ

題

④季語ではありません

手街自由題

締切・五月二十日
発表・『浄土』七月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

マンガで楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

滅相

「めっそう」は「滅相もない」と使われ、とんでもないとか、あり得ませんという意味ですが、仏教ではこの滅相は生滅変化する四つの相のことをさします。

発生する生、存在する住、変化する異、消滅する滅がその四つの相で、生まれてから滅するまでのことです。

この四つの相がないということで、とんでもないといった意味で使われていますが、確かに生、住、異、滅がないなんて、わたしたちには想像もつきませんね。



※このような 団体・液体・気体といった状態の変化を「相転移」と言います。

編集後記

道端の花の姿に春惜しむ

岱潤

建築の世界に「ユニバーサルデザイン」という言葉がある。もう何年も前から言われている言葉だ。つまりバリアフリーを一步進めて、バリアがあるからバリアフリーにしなければならぬという基本的な考えにたつて、特殊な設備で障害を持った人に対応するのではなく、誰もが利用しやすい普遍的な空間を創ろうというものだ。すべてのひとにとつてやさしい空間を作ることで、障害者や高齢者にとつてもやさしいということだ。この逆ではない。この理念と似た考え方として、いま同和教育、人権教育の面でも「共生教

育」という理念を提唱されている先生がいる。差別をなくそうという教育が知識偏重におちいり、その知識を持つて差別を行ったり、逆差別などという偏見まで生まれたりしているなか、人間の本来的存在意識を問い直し、人間は一人では生きてゆけず、人と人と、さらには人と他の生物や自然とも共生してゆかなければ存在しえないということを認識する教育こそが平和、人権を押し進める上で必要だと力説されている。もちろん部落差別は、差別される側にはまったく問題がなく、差別する側の偏見から生まれている差別である。あたりまえのことを言い続けることの大切さをつくづく感じる。(長)

●お知らせ●このたび当会副会長当誌編集人の宮林昭彦先生が第百十二世法主として大本山光明寺に入山されました。当誌編集人は今号より当会理事長佐藤良純先生が継がれることとなりました。

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十七巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十二年四月二十日
平成十二年五月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三三・五七八・六九四七
FAX〇三三・五七八・七〇三六

振替〇〇一八・八八二八七

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害注意



民衆近し、静かに



足元注意

住友海上

代理店



踏切あり



災害口



踏切

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



きれるな



われ物注意



安全第一



注意注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人鑽仰会まで。

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

水晶腕念珠 ①6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

②6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 ③6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

プレスレッド ④6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

⑤8ミリ珠・M(16センチ)2,700円

⑥8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

